生徒が成長する旅

瀬戸内海と松山・道後温泉

日本初の国立公園・瀬戸内海は、14年に指定80周年を迎える。広島と愛媛、松山を結ぶエリアは、多島美に代表される風光明媚な風景とそこで育まれた歴史、文化、産業など多様な資源の宝庫。こうした瀬戸内海の魅力を最大限に引き出しながら、松山、道後温泉の資源を組み合わせる旅は、まさしく教育旅行の「新定番」となった。瀬戸内海と松山教育旅行の概要をリポートする。

夜の道後散策・浴衣で温泉文化を体感

松山が提供するメニューは、他地域との差別化を図り、教育的視点から地域の資源を磨き上げたもの。多様なメニューをアレンジしながら学校の希望に沿うメニューを提案する。

数年前は修学旅行生を見ることのなかった松山に、今では50校を超える修学旅行生が訪れるようになった。ある学校の生徒アンケートでは満足度95%の驚異的な数字をはじき出し、修学旅行を契機に始まった学校間交流や、体験メニューが授業に採択された例もある。

松山市では、魅力の体験メニューに「いかに地域の人や文化にふれあうか」という視点をあて、「心と心のふれあい・交流」をプラスし、生徒が成長を実感できる旅を提案するとしている。

松山・道後ゾーン

松山市は、「いで湯と城と文学のまち」として、ミシュランガイド三つ星施設の日本最古の湯「道後温泉本館」や標高132㍍の山頂に聳え立ち、瀬戸内海から西日本最高峰の石鎚山まで一望できる「松山城」、俳人正岡子規をはじめとする文人ゆかりの歴史的、文化的資源がまちなかに多く点在している。

道後温泉は、足を痛めた白鷺の傷を癒した伝説から始まり、神話の時代には少彦名命の病も癒し、歴代皇族方も行幸に訪れた癒しの聖地。

まち歩きを意味する「ハイク」に、「俳句」の学びの視点を取り入れた教育素材である「松山はいく」というメニューを開発している。市内を吟行体験する「明治体感！松山はいく～松山城・句会ライブ青春編」や「松山はいく～道後パワースポットはいく」などのメニューを用意している。

これぞ「和文化」、「和の作法」体験～道後・夜の体験メニュー

松山市は、主要施設がまちの中心部にコンパクトに納まっており、宿泊先として推奨している道後温泉は、車で10分以内。本館はミシュランガイドブックで三つ星最高評価や、映画「千と千尋の神隠し」の油屋のモデルとしても有名で、一般旅行客と同等レベルの食事やおもてなしは折り紙つき。そこで、道後の強みを生かし、ホテルや道後商店街などと開発したのが、プチ研修とぶらり散策だ。夕食前後の時間を利用して会席料理や座敷マナー、食育など約15分で構成されたプチ研修は、時間を有効活用して、研修率もアップできると好評。ぶらり散策は、明治の雰囲気漂う道後温泉本館を中心に、特別料金で乗車できる人力車や本館前での集合写真、正岡子規に代表する「俳都・松山」にちなんで、散策中に俳句をつくり、特設ポストに投句すると、後日、最優秀句にみかんジュースが贈られる特別イベントもある。安全確保は、市職員やホテルスタッフが責任を持って対応している。

和文化や作法を学ぶ

瀬戸内海ゾーン

感動交流　国産農産物の凄さを学ぶ～みかんの島・中島で

瀬戸内海の中島は、みかん王国・愛媛を牽引してきた地。チャーター船だと、広島から約1時間で直接上陸できる。収穫時期は10月から5月の約8カ月間。全農家の中で携わる戸数の割合は、愛媛県内の島で堂々の第1位を誇る。地元保育園児による歓迎に始まり、JA職員から国産みかんの安全性や技術力、まつやま農林水産物ブランドの誕生秘話を聞き、西日本一の能力を誇る選果場体験やみかんの収穫体験を行う。延長500㍍の美しい姫ヶ浜ビーチでは、投げ釣りを体験。昼食で人気の海鮮バーベキューと釣った魚を一緒に焼いて食べることも可能だ。

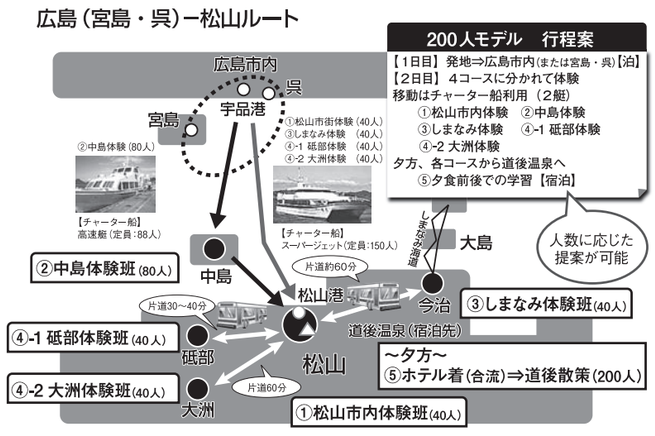
みかんの収穫体験

絶景　しまなみ海道満喫体験～水軍の里・大島

松山市内から車で1時間、「しまなみ海道」の愛媛側玄関口今治市に到着する。ここでの定番メニューは、世界唯一の自転車で渡る「橋上サイクリング」で、島々を眺めながらのサイクリングは爽快そのもの。そして、しまなみ海道最初の島・大島では、昼食で海鮮バーベキュー、観潮船での急流体験を行い、自然の力、雄大さを体感する。また、日本唯一の水軍博物館である村上水軍博物館では、海の大名と呼ばれ、海原を自在に駆けめぐった村上水軍の貴重な文献や出土品から、水軍文化を学ぶ。

しまなみサイクリング

広島（宮島・呉）ー松山ルート



周辺ゾーン

動物からのメッセージ～動物とのふれあいを通した環境学習

松山市内から車で30分。隣町の砥部町には、西日本最大級、20年4月に行動展示型にリニューアルされた「とべ動物園」があり、日本初の人口哺育に成功した、ホッキョクグマ・ピース、アフリカゾウ、スローロリスとの触れ合い体験、動物を通した地球温暖化や森林伐採、密輸問題など、実際に人工哺育を担当した飼育員から環境問題について直接学べる。

伊予の小京都・大洲で「伝統文化」と「自然（清流）」を体感

大洲は六万石の城下町として栄え、伊予の小京都、水郷のまち。「日本3大うかい」の1つに数えられる、希少な「鵜飼（うかい）」の鵜匠との交流体験や和船の「櫓漕ぎ」を特別体験し、および食料の安定的確保が緊急の課題とされることに加え、わが国では高品質で安全な食料が求められている。そうした中、国の採択事業として愛媛大学では、最先端の情報技術や自動化技術を駆使し、計画的に食料を生産する植物工場システムの普及・拡大に努めている。現在注目され、発展著しいIT技術の応用研究、知能ロボットの開発などについて学び、理解を深める実験体験を行う。

このほかにも、地元大学生とのまち歩きや、史上初、地方球場として2回目のオールスターゲームが開催された坊っちゃんスタジアムツアー体験など、多数のメニューを用意している。

充実したモデルコース

チャーター船を確保し、効率的な移動

広島ー松山間は定期便も運航されているが、チャーター船の利用で自由度の高いスムーズな移動が可能となり、貴重な時間が有効活用できる。同時に単なる移動ではなく、「瀬戸内海クルーズ」の貴重な体験メニューともなった。昨年は13校がチャーター船を利用し、宮島などから直接松山入り。安全で快適な約1時間の瀬戸内海クルージングを満喫した。

山口県東南部にある周防大島でマリン体験や漁業体験、民泊体験を行い、チャーター船で松山へ入るコースもある。また、民泊体験や平和学習との組み合わせも増えている。

一方、バス利用のモデルコースでは、明石海峡大橋を渡り、四国のほぼ中心に位置する徳島県西部の「そらの郷」で山村暮らし体験・民泊体験を行った後に、松山へ移動。帰りは、瀬戸内の資源が集約しているしまなみ海道を眺めながら、帰路へ着く充実のコースもある。

留学生と吟行体験

松山だからこその国際理解メニュー　松山・英語はいく～国際交流編

近代俳句は世界に広がり「日・EU英語俳句コンテスト」のセレモニーが松山で行われるなど、国際的にも「日本の俳都は松山」だと認識されている。松山にいる留学生の高い志にふれながら、観光名所で吟行体験を行い、英語俳句を作り上げる。俳句の魅力や日本語の奥深さを再発見するとともに、国際人に必要な語学力や、自国文化を外国人に伝える力を養う。

新しい農業　「植物工場」～最先端の工業技術に触れる

世界的な人口急増に伴う食料の安定的確保が緊急の課題とされることに加え、わが国では高品質で安全な食料が求められている。そうした中、国の採択事業として愛媛大学では、最先端の情報技術や自動化技術を駆使し、計画的に食料を生産する植物工場システムの普及・拡大に努めている。現在注目され、発展著しいIT技術の応用研究、知能ロボットの開発などについて学び、理解を深める実験体験を行う。

このほかにも、地元大学生とのまち歩きや、史上初、地方球場として2回目のオールスターゲームが開催された坊っちゃんスタジアムツアー体験など、多数のメニューを用意している。

— 協力 —
松山市産業経済部観光産業振興課
〒790-8571　愛媛県松山市二番町4-7-2
TEL089-948-6558　FAX089-934-1764
教育旅行専用HP
おいでんか　松山　検索

修学旅行の現状と課題

全国修学旅行研究協会　岩瀬正司理事長に聞く

「体験」重視する傾向

校長の裁量で内容に工夫を

中学校での修学旅行は、京都、奈良の古都を巡ったり、長崎、広島の被爆地を訪れたりする定番のスタイルのほか、他の地域の農山漁村で農林漁業を体験するスタイルも増え、多彩になってきた。今の中学校は修学旅行に何を求めているのか。全国修学旅行研究協会（全修協）の岩瀬正司理事長に修学旅行の現状と課題を聞いた。

◇　◇

――まずは全修協の役割を簡潔に説明してほしい。

「遊びではないという教育性。そして、安全性。学生の義務教育の段階なので、経済性。この3つの基本的な考え方に立った修学旅行をいかに実践していくか。そのためにいろいろなお手伝いをしていこうというのが、この協会が設立された趣旨だ。具体的には修学旅行にかかわる調査や研究、啓発・開発事業、それから業者と自治体、あるいは学校とのネットワーク作りなど多岐にわたった活動をしている」

――中学校での修学旅行の意義は何か。

「日常の学校でのさまざまな学習を、修学旅行を通じて実証し、身に付けていく。これが修学旅行の1つの大きな目標だ。学校生活とは違う非日常の世界に入るわけだから、そこでのさまざまな体験をしてもらうことも狙いの1つにある」

――近年の傾向をとらえると。

「全国的な面で言うと昔から日本の古都を探るような、奈良、京都中心の旅行が多かった。関東、特に東京は顕著だが、西日本も多い。それが1つの基本的なパターンだが、今、新しい学習の流れの中で体験を重視する傾向が出ている。昔のものを見てくる、触ってくる、感じてくるという体験以外に、日常では味わえない農業などの体験、工場へ行っていろいろなことをやってくる就業体験などの例が見られる。もう1つは行き先の広がり。特定の奈良、京都だけではなくて、日本全国いろいろな方向に行っている」

――体験といっても、絵皿作りといったちょっとしたものから、農家で家業を手伝うものまで幅広い。

「体験学習」を定義するとしたら。

「自分の頭の中で理解するのではなくて、心と体でそれをやってくることが体験だ。学校で社会科の先生が黒板で書いたものを写しただけでは体験にはならない。よく『米という字は八十八と書く。お百姓さんが88回の手間隙をかけて作るからだよ』と言われる。それは頭では分かっているが、実際に農家に行って田んぼに入って、土や稲の感触、水の冷たさ、そういったものを味わって、ああこんなことで米は作られるのかと分かるのが本当の体験だ。そういう意味では、東京の子が京都へ行って清水焼の絵付けだけしてくるのを体験とは言えないだろう」

――体験が増えてきた背景は。

「自分が将来どんな仕事に就いたらいいのか分からない子どもばかりになってしまっている。だから、文部科学省では、子どもたちに自分はこういう人間になるという職業意識を小さいときからいろいろな機会を通じて目覚めさせようという『キャリア教育』の実施を学校に指導している。東京の場合では原則5日間、駅で売るというかたちの職業体験も多い」

――修学旅行の行き先が広がってきたのは、体験学習が増えていることが影響しているようだ。

「学校では修学旅行を通じて子どもたちに本物を見せたいと考えている。奈良、京都に行って昔の日本人の心に触れてくるというのも1つだが、奈良、京都以外にもいろいろな本物が日本にある。東京の学校でも関西ではなくて、東北へ行って、農業体験、漁業体験をしてくる学校が目立ってきた」

――修学旅行は学習の一環だから、教育効果が求められる。だが、農業体験などの体験学習はどれだけの学びがあったのかをどう把握したらいいのだろうか。

「国語、算数、理科、社会の教科であれば、テストをやれば身に付いたか付かないかは分かるが、修学旅行、学校で呼ぶところの特別活動について評価するのは、難しいことは難しい。だが、それは日常の生活にすぐ表れる。農家に行ってきた子供たちが家に帰ってきたらちゃんとあいさつするようになったとか、進んで食器の後片付けをするようになったという事例はいくらでもある。そういう面での効果は出ている。ただ、今までの生活を50点だとすると何点になったのかの数値化ができるものではない。教育には評価が数値化できる教育と数値化できない教育があっていい」

――今の修学旅行の課題は。

「校長の裁量権があまりにもなさすぎる。私もずっと中学校の現場にいたので、それを一番感じる。東京の修学旅行の場合、時間も、費用も、利用する交通機関も制約されている。交通機関では、飛行機を使ってはいけないとか。そういうことがあるから、その学校の実情に合わせて校長の判断でいろいろなことができる修学旅行にしてほしい」

「もう1つは、費用があまりにも高い。東京の場合、だいたい5万5千円前後でやっているが、今の社会状況、経済状況、それから保護者の価値感覚から言って、2泊3日の修学旅行で5万5千円は高い。もっと何とかならないだろうか。例えば、大学生と義務教育中の中学生では違うわけなので、同じ学割でも中学生は5割引きなんて言わないで7割、8割と負けてくれる配慮を国全体でしてほしい。旅館も高い。今の子どもたちは舌が肥えているから、なまじなものを出しても満足しないというのはあるが、将来のお客さまという観点からすればもっと安い値段でやってもらってもいいはずだ」

――確かに2泊3日で5万5千円はいい値段だ。

「世の中全体で子どもたちを育てているという意識を持ってもらいたい。交通費の面、宿泊費の面、それから施設入場費の面、博物館などは中学生を無料とするところが増えているが、それ以外の施設は入場料金がかかる。修学旅行の場合は1カ所だけでなく、3カ所、4カ所と施設を回るから積み重なるとけっこう金額がはる。例えば神社の拝観料は子どもたちは無料でいいと思う。逆に大人からは500円ではなくて1千円とるような認識でやってもらいたい」

――修学旅行を手配する旅行会社に対し、もっとこうしてほしいと思うことはあるか。

「昔は時間的な余裕も経済的な余裕も割とあったから、修学旅行を決定する際の実地踏査も複数の教員が行って、いろいろな情報を集めてコースを作ることができた。だが、今は非常に締め付けが厳しくなり、実地踏査は1人で、しかも2泊3日で行う必要がないから1泊で行きなさいといった状態だ。毎年同じ所に行ってもコースは微妙に違う。昨年と同じ子どもを連れていくわけではない。修学旅行の第一は安全で、何も分からない子どもが行くのだから、複数の目で慎重に下調べをやらなければならない。だが、今の学校の先生たちは、現地に行って調べることがなかなかできず、インターネットで情報を集めるしかなく、自分自身でつかむ情報が非常に少なくなっている。旅行会社はいろいろと知識やノウハウを持っているので、情報をどんどん学校に提供してもらえるとありがたい」

――一方、受け入れる宿泊施設や観光施設などへの要望は。

「現地で受け入れてくれる人たちには、ここへ来ればこういうことができる、今は行っていないがこういうこともできそうだ、という情報を提供してほしい。学校の先生がここに行けばこういうことができると思い込んでいて、実際に行ってみたらそれができなかったというケースもある。実際にそこにいる人たちにいろいろなことを聞かないと、分からないことがある。あとは何とか値段を下げる工夫をしてもらいたい」

【聞き手・板津昌義】

いわせ・まさし氏
1950年3月20日生まれ
1972年3月、早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修卒業
以後、墨田区立吾嬬第三中学校教頭、墨田区立鐘淵中学校教頭、板橋区立志村第三中学校校長などを歴任
2000年4月、中野区教育委員会事務局指導室長
2003年4月、世田谷区立尾山台中学校校長
2009年度、全日本中学校長会会長
2010年4月、世田谷区帰国・外国人教育相談室長
2011年5月、公益財団法人全国修学旅行研究協会理事
同年6月、同理事長

本社キャンペーンテーマ　観光立国実現は、地方（地域）から推進を

地域の未来を皆で見つめ直し
観光力を創造、発揮する時代

観光経済新聞がお手伝いします
永年、全国で観光地活性化座談会を展開した実績は、比類ないものです。
座談会やシンポジウムの実施を通して地域にふさわしい方向を見出してください。

地域産業　地域行政　観光産業　地域住民　新たな観光資源

観光関連事業者だけの観光産業ではない
地域内の一般産業も観光と無縁ではない
住民ホスピタリティなければ観光地ではない

域内4者座談会
シンポジウム
開催のご提案

お問い合わせ　観光経済新聞社・産業観光活性化支援室
TEL03-3827-9800　E-mail:info@kankokeizai.com
地域活性化シリーズ座談会資料（PDF版）はメールでご請求ください。
ご要望に応じて企画説明へ担当者派遣にも応じます。